

<これまでの復習>

§ 1 問いと推論は、どう関係するのか？

- ・推論は問いを前提する。
- ・問答推論 $Q, \Gamma \vdash p$

$$Q2, \Gamma \vdash Q1$$

§ 2 推論的意味論とは何か？

- ・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流推論と下流推論を判別できることである。

§ 3 推論的意味論から問答推論的意味論へ

- ・命題を理解するとは、適切な／不適切な上流問答推論と下流問答推論を判別できることである。
- ・疑問詞は、論理的語彙と同様に「保存拡大性」をもつ。

§ 4 文の意味と発話のコミットメント

- ・文は関数であり、広い意味の文脈を引数とし、命題を値とする。
- ・発話は、命題の真理値や焦点位置や会話の含みや言語行為にコミットする。

§ 5 焦点と二重問答関係

- ・相関質問によって発話の焦点位置は指示されており、相関質問はより上位の相関質問に答えるために設定される。

§ 6 言語行為としての質問の特殊性

§ 7 問答の観点からの真理論

§ 8 真理の代文説から真理の問答代用説へ

<第二部：Welcome to the new world！>

§ 9 自然主義からの多様な表象・記号・意味の説明

- 1、理論哲学の概観：自然主義 対 構成主義
- 2 ミリカンの生物学的自然主義

(2) 自然的記号 (natural signs) と志向的記号(intentional signs)の区別

自然的記号＝「ある有用な結果がその副産物としてたまたま自然的記号の生産をもたらす場合」

志向的記号＝「記号の生産そのものが有用な結果であるような場合」

(3) 志向的記号の区別：オシツオサレツ記号と記述的記号と指令的記号

(4) 言語的記号: オシツオサレツ発話としての質問

§ 10 廣松四肢構造論と二重問答関係

- 1 認識の四肢構造

能識的或者 as 能知的誰某：現相的所与 as 意味的所識：

- 2 実践の四肢構造

能為的誰某 as 役柄者或者：實在的所与 as 意義的価値

- 3 四肢構造論と二重問答関係

<本日の始まり>

3 四肢構造論と二重問答関係（前回少し話しましたが、もう一度最初から書き直します）

（1）認知的四肢構造と二重問答関係

#問答と「として」構造

Q1「Xは何ですか？」 A1「XはYです」

「XはYです」と返答する者は、対象XをYとしてとらえており、それを命題で表現している。問いは探索であり、Xを求める探索は、XをYとして捉えることによって完了する。（言語を持たない動物の探索行動も、「として」構造を持つだろう。例えば、カエルは、対象を「エサとして」知覚し、それを舌で捕まえる。知覚もまた「として」構造を持つ。知覚の「として」構造は、ゲシュタルト構造（地-図構造）である。知覚のゲシュタルト構造と発話の焦点構造の類似性は、共に探索活動の成果であることに由来すると思われる。）

Q1「Xは何ですか？」という問いに答える時、答える人は、問いを理解し、その前提を引受けている。（たとえば、Xが存在することを認めている）。

<発話者は、ある問い（Q1）を引受けた者として、ある発話（A1）を、その問い（Q1）への答えとして発話する>

ここでの主体の二肢性（能知的誰某と能識的或者）は、次のようになる。

能知的誰某=A1の発話者

能識的或者=問いQ1を問う者

ここでの対象の二肢性（現相的所与と意味的所識）は、次のようになる。

現相的所与=発話

意味的所識=問いQ1への答え：

（注、上記の例ではどうなるだろうか。子供が牛をみて「ワンワン」というのを聞いて、大人が、子供はその牛を「犬」だと思っていると理解する。つまり、その大人は、子供として、その牛を「ワンワン」として認知する。このとき、その大人は「その牛は、子供にとって、何か？」と問い、子供として「その牛は、ワンワンである」と答えるのだろうか。あるいは、子供にとっての「これは何か？」「これはワンワンだ」という自問自答を照応することによって、つまり他者の問答を照応することによって、他者の発言を理解するのだろうか。）

#二重問答関係と四肢構造

Q2→Q1→A1→A2 という二重問答関係があるとしよう。一般に、問いを問う時には、理由や目的があるだろう。たとえばQ1を問うのが、Xのためであるとしよう。

（たとえば、Xを手に入れるという目的のとき、Q2「どうやってXを手に入れようか？」という問いに答えるために、Q1を問うのだろう。あるいは、Xを実現するという目的のとき、Q2「どうやって、Xを実現しようか？」という問いに答えるために、Q1を問うのだろう。あるいは、Xを知るという目的の時、Q2「どうやったらXを知ることができるだろうか？」という問いに答えるために、Q1を問うのである。）

人が Q2「Xは何ですか」を問うているとしよう。Q2の暫定的な答えが「XはYである」である
としよう。しかし Y が何かわからないとき、Q1「Yは 何ですか」と問う。Q1の答えが「Y
はZである」とき、Q2の最終的な答えは「XはZである」となる。

Q2「Aは何ですか」

Q2の暫定的答え (tentative answer) (TA2)「AはBである」

Q1「Yは 何ですか」

Q1の答え「YはZである」

Q2の答え「XはZである」

ここには、次のような主体の二肢構造がある。

S1は、<Q2を問うもの (S2) >として、Q1を問う。

この二肢性は、上記の二肢性と次のように関係する。

<能知的誰某=A1の発話者は、能識的或者=問いQ1を問う者として、発話する>

この「能識的或者=問いQ1を問う者」は、次のような二肢性を持っている。

S1は、<Q2を問う者 (S2) >として、Q1を問う。

一般に、発話する者は、問う者(問いを引受ける者)として問いに答えており、問う者は、より上
位の問いを問う者として問いを立てる。

(2) 実践的四肢構造と二重問答関係

#実践的四肢構造と二重問答関係

Q2→Q1→A1→A2という二重問答関係があるとしよう。Q2もQ1も実践的な問いであり、
Q2の答えを得るために、Q1を問い、その答えA1を推論の前提に用いて、Q2の答えA2を得
たとしよう。

たとえば、靴職人がQ2「どんな靴をつくろうか?」と問い、Q1「そのお客はどんな靴がほし
いのだろうか?」と問い、A1「彼女は、上品で、格好良く、どんなところにも履いていける靴
を求めている」を知り、それに基づいて、XさんはA2「〇〇の素材で××のデザインで高級な靴
をつくろう」と答えにたどり着くとしよう。

Q2「どんな靴をつくろうか?」は、実践的問いであるが、Q1「そのお客はどんな靴がほしい
のだろうか?」は、記述的問い(理論的問い)である。ここでの実践的四肢構造(能為的誰某—役
柄者或者: 実在的所与—意義的価値)は次のようになる。

**<靴職人(能為的誰某)は、商品生産者(役柄者或者)として、靴(実在的所与)を、高級品
(意義的価値)として、制作する>**

#実践的四肢構造を二つに分ける

廣松のいう実践的世界では、対象は、表情や価値を持つ者として現れる。そして、その表情や価
値は、主体の行為と深い関係を持つ。仮に主体が行為していないとしても、対象の表情や価値は、
主体の行為を促したり、規制したりする。したがって、実践の場面での認識もまた、この実践的
四肢構造で理解されている。明確な議論のためには、この実践の場面での認識の四肢構造と、行為に

関する四肢構造を（厳密に区別できるかどうかの問題はあるが、とりあえず）区別するのがよいだろう。後者を「行為の四肢構造」と呼びたい。

#行為の「として」構造（＝二肢構造）

同一の振る舞いであっても、様々な行為として記述可能である。

Xは、ある行為を、ポンプを押すこととして、行う（理解する、記述する）

Xは、ポンプを押す行為を、家の住人を殺そうとする行為として、行う（理解する、記述する）

Xは、大統領を殺すことを、革命を起こすこととして、行う（理解する、記述する）

Xは、ある行為を、ポンプを押すこととして、行う（理解する、記述する）

（参照、アンスコム『インテンション』管豊彦訳、産業図書、1984、§23-27。）

同一の振る舞いであっても、異なる行為として記述されうる。行為については、複数の記述が可能であるが、それらはずねに「として」構造によって理解され、記述され、実行される。（それはなぜだろうか。）

ある一つの振る舞いを、行為Aとして、行為Bとして、行為Cとして、記述することが可能であるとき、A、B、Cはどのような関係にあるのだろうか。上記の例では、ポンプを押すこと、住人を殺すこと、革命を起こすことは、目的手段の関係にある。ポンプを押すことは、井戸水に毒を入れること、という行為などととも、住人を殺す、という行為の部分構成している。

（これらの行為は、対象が異なる。ポンプを押す行為は、ポンプを対象とし、住人を殺す行為は、住人を対象とし、革命を起こす行為は、政府を対象とする。同一の行動でも行為としての記述が異なると、行為の対象が異なる。したがって、行為の四肢構造を語る時、対象側の二肢構造は、行為の対象の二肢構造ではなく、行為そのものの二肢構造となる。例えば、次のようになる。

行為主体が、＜ポンプを押す行為＞を、＜住人を殺す行為＞として、行う

この場合の行為の二肢構造は、行為が向かう対象の二肢構造ではない。行為そのものの二肢構造である。

#行為主体の「として」構造（＝二肢構造）

行為の「として」構造は、行為者の「として」構造に対応している。

＜殺人者として＞、ポンプを押す。

＜革命家として＞、住人を殺そうとする。

＜民衆の幸せを願う者として＞、革命を起こそうとする。

#行為の四肢構造

行為A1を行う者S1は、より上位の目的（A2をおこなうこと）を持っている。A1を行うことによって、A2を行おうとする。このより上位の目的を持つ者をS2とするとき、この行為の四肢構造は次のようになる。

＜S1がS2として、行為A1を行為A2として、行う＞

人が、殺人者として、ポンプを押すことによって、住人を殺そうとする。

人は、革命家として、住人を殺すことによって、革命を起こそうとする。

人は、民衆の幸せを願う者として、革命を起こすことによって、民衆を幸せにしようとする。

行為の二肢構造：＜行為すること＞は、世界を変えることなので、行為とは、「世界の変化」
（実在的所与）の実現を、「ある目的」（意義的価値）の実現として生じさせることである。

主体の二肢構造：行為する主体は、ある目的を持つ者として、ある行為を行う。

#行為にかかわる二重問答関係

実践的な問いへの答えは、次のようなものである。

Q2「Aの実現するために何をすべきか」 A2「Bすべきである」

Q1「Bを実現するために、何をすべきか」 A1「Cすべきである」

このような問答があるとしよう。このとき、Q2の答えはとりあえずは、Bであるが、しかしそれはまだQ2への十分な答えにはなっていない。なぜなら、もしそれが十分な答えならば、Q1のような問いを立てる必要はないからである。「Bをすべきである」に賛成したとしても、そのために何をしたらよいのわからなければ、行為に移れない。そこでQ1をとい、A1を得たのだとしよう。このとき、A1の答えから直ちに行為に移れるならば、A1はQ2の十分な答えである。

Q2→（暫定的な答え TA2）→Q1→A1（=A2）

行為は、実践的問いに対する答えそのものではなく、その実行である。

#二種類の二重問答関係

理論的な問い Q2 に答えるために Q1 を立て、Q1 の答え A1 を前提にして、Q2 の答え A2 を得るということ。（理論的な問いと理論的問いの二重問答関係）

実践的な問い Q2 の場合には、二重問答関係は、二種類ある。それは、

①Q1 が理論的な問いの場合（実践的な問いと理論的な問いの二重問答関係）

Q2「お客さんに満足してもらえる靴を作るにはどうすればよいのか？」

Q1「お客さんは、どんな靴を求めているのだろうか？」

②Q1 が実践的な問いの場合（実践的な問いと実践的な問いの二重問答関係）

Q2「今夜、何を食べようか？」

TA2「餃子をたべよう」

Q1「どの店に行こうか」

実践的な問いとは、答えが真理値を持つ記述になるのではなくて、真理値をもたない意思決定になる問いです。

①Q2 に答えるために上記のように理論的な問い Q1 を立てる、その答え A1 を前提に用いて、A2 を結論とする実践的推論をおこなう。

②Q2 の答えとして TA2 を得るが、しかし、TA2 から直ちに行為に移ることができない場合、Q1 「TA2 をどうやってそれを実現するか」という実践的な問いを立てる必要が生じる。

注 「私的な行為」は存在しない？

私たちが、つねに「役割的或者」として行為するならば、(次の意味の)「私的な行為」は存在しないといえる。「私的言語」が成立しないならば、「私的な行為」は成立しない。

#アンスコムによれば、意図的な行為とは、「何をしているの」と問われて、観察によらずに即座に「コーヒーを飲んでます」と言えるような行為である。アンスコムは、これを「実践的知識」と呼ぶ(アンスコム『インテンション』)。このような行為は、さらに「なぜ…しているの？」と問われたら、観察によらずに即座に「気分をリフレッシュするためです」のように答えられる。

したがって、意図的行為は、実践的知識によって構成されており、言語によって構成されている。身の回りの多くのものには名前がある。その理由の一つは、多くのものは人間によってつくられたものだからである。行為も人間によってつくられたものであるので、名前を持つ。ただし、名前は一般的なもののなので、個別の行為の名前ではなく、行為のタイプの名前である。歩く、歯を磨く、泥棒する、などである。

私たちの行為はすべて、おそらく社会的な役割をもっている。

#私的言語が不可能であるように、私的行為は不可能である。私的行為とは、行為を記述する言語が私的言語であるような行為である。(私的言語が不可能であるのは、規則に従っていることと、規則に従っていると思っていることが、区別できないからである(ウィトゲンシュタイン『哲学探究』)。例えば、私がXさんを殴るとか、Xさんにの頭をなでるとか、ではなく、私がXにある行為 ω をしたという。しかし、行為 ω を公的な言語で定義できない。「私は ω する」の上流推論や下流推論を、(十分な仕方では)公的な言語でかたれない。

私は ω する \vdash 私は ω しないことはない

という推論はできるかもしれないが、それは ω の同定に役立たない。

ミニレポート課題

1、同一の振る舞いであっても、異なる行為として記述されうる。行為については、複数の記述が可能であるが、それらはつねに「として」構造によって理解され、記述され、実行される。それはなぜだろうか？

2、実践的な問いと実践的な問いの二重問答関係の例をあげて下さい。

Q2 「今夜、何を食べようか？」

TA2 「餃子を食べよう」

Q1 「外で食べようか、それとも家で作ろうか？」

実践的な問いとは、答えが真理値を持つ記述になるのではなくて、真理値をもたない意思決定になる問いです。